

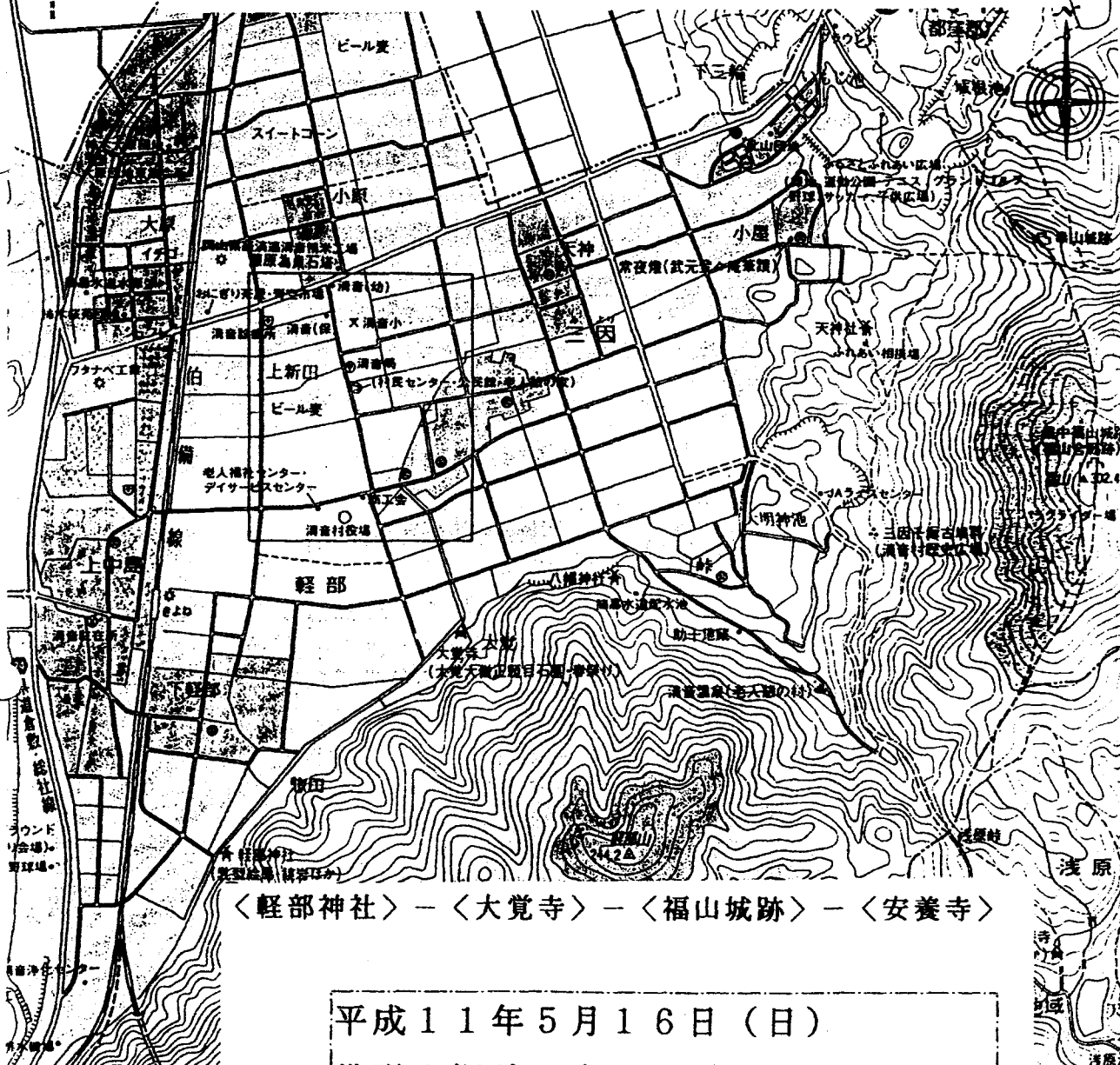


井原鉄道を経由して

南北朝の争乱の跡を歩く

④7 総社市

備中福山城跡と古刹を訪ねて



〈軽部神社〉 - 〈大覚寺〉 - 〈福山城跡〉 - 〈安養寺〉

平成11年5月16日(日)

備陽史探訪の会

歴史民俗研究部会

講師：種本実

備陽史探訪の会

著作権に関わる情報が含まれるため掲載できません。

CONFIDENTIAL

第3セクター・井原鉄道（株）

（1）その開通まで

昭和28年8月 吉備線の福山市への延長を目指し
「岡山・福山間国鉄吉備線延長期成同盟会」が結成される。

昭和41年 7月 工事着手

〃 55年12月 国鉄再建のあおりを受け工事凍結

〃 61年12月 第3セクター「井原鉄道」設立

〃 62年12月 工事再開

平成 9年 9月 福山駅への乗り入れ決定

〃 10年 6月 全線のレール締結

〃 11年 1月11日開業

（2）井原鉄道の概要

- ・総延長 広島県神辺町～岡山県総社市まで41・7km
- ・第3セクター 広島県と岡山県、関係自治体12町村や民間・74団体・企業が出資。資本金7億円。
- ・一日6千人の乗客で13年後に黒字経営を目標としている。

清音村軽部

清音村は明治22年成立。清らかな高梁川の清流（山水有清音）の古語から命名された。

平安時代に編纂された辞典「和名抄」には〈加流倍〉と訓がある。

高梁川は〈川辺川〉と称され、軽部村中島と対岸の川辺村（現・吉備郡真備町）との間に高瀬舟による川辺の渡があり、軽部宿としてにぎわった。

「一遍上人絵伝」に軽部宿が、応安4年（1371）に九州探題として筑紫に下った今川貞世の紀行文「道ゆきぶり」にくかるべ川〉が記されている。

宝暦（1751－64）末に記された「中国行程記」によれば、川辺川は普段は3筋の流れで、真中の1本が中島と川辺村との境だった。この渡しに明治初年橋が架けられたが、明治26年の大洪水後、大正8年の架橋まで舟渡しに復された。現在は新旧2本の川辺橋が架る。

軽部神社

建武元年（1334）福山城主大井（江）田氏経が紀伊の熊野神社より速玉男命、事解男命、伊弉諾尊の3神を勧請し、軽部山の嶺に社殿を創立し祈願所としたことに由来する。建武3年の福山城合戦の際社殿も焼失。その後、幸山城主石川氏が祈願所として祭典を行ってきたが、天正3年（1575）の備中兵乱－毛利氏と三村氏の攻防により焼失。

天正4年、毛利輝元の所領となり以前からの3神に加え、天照大神、国常立神の2神を併せ、社名も「五社王子権見」と改め祀った。

社殿が山陽道を見下ろせる位置にあつて、参勤交代の大名に神の諫めがあるとのことから、延宝6年（1678）現在の場所に移転された。

明治2年、社号を「軽部神社」と改めるが、地元では「王子の宮」で親しまれている。

以前、境内に垂乳根の桜と呼ばれる、枝垂れ桜があつたので、乳神様として近郊の女性から信仰を集めた。乳の形の絵馬を奉納すれば、安産や母乳の出がよくなると、各地から手作りの絵馬が多く奉納されている。

大井（江）田氏経…資料1

王子権見…資料2

清音山大覚寺

日蓮宗。本尊の題目石は岡山県指定重要文化財。大理石製の傘塔婆で総高224cmの方柱状。正面と両側面に「南無妙法蓮華經」の題目が髭題目の書体で刻まれてある。裏面の銘によれば、この題目塔は某氏が亡父の7回忌供養と、法界衆生の平等利益を願って暦応5年（1342）5月に造立したもの。ただし、寺伝によれば大覚大僧正が福山城合戦での多くの戦死者を弔って建てた塔であり、題目は大覚大僧正直筆とのこと。全国でも最も早い時期の題目石である。日蓮宗では南北朝頃から、石造傘塔婆に題目を刻して供養塔にすることが流行し始め、この形式の塔婆を題目塔と名付けている。

和気郡和気町法泉寺、岡山市西辛川の大覚教会の塔と共に3大題目石とされる。表面を手でさすると難病が治癒するといわれ、宗派を超えた信仰がある。

明治30年地元の某氏が寺の建立を発願、大正10年に本堂が落成した。4月3日が大覚大僧正の命日と言われ、新暦5月2、3日に春祭りを行っている。

「備前法華」の系譜……備前は日蓮宗の勢力が強い地方である。路傍に「南無妙法蓮華經」と刻まれた題目石がよく見受けられる。南北朝の初期、鎌倉末期に日蓮宗を京都に布教した日像の高弟大覚大僧正により備前に伝えられた。大覚は御野郡浜野村（岡山市浜野）に松寿寺を、二日市に妙勝寺を開いた。富山（岡山市大安寺）の城主松田元喬は大覚に感化され日蓮宗に転じ、蓮昌寺を創立した。

大覚は、備中野山（上房郡賀陽町）の妙本寺に多年留まり、備前・備中・備後への布教を注いだ。大覚の後は、後に帰京して妙覚寺を開いた高弟の日実により、引き継がれた。その後、「備前法華」は「備前不受不施」へとつながっていった。

大覚大僧正……資料3

備中福山城

高梁川東岸の、北に総社平野、山陽道を一望できる、標高302mの福山山頂にあった中世の山城。

山頂には平安時代から山岳仏教が栄え、報恩大師開基と伝わる福山寺があった。寺の建造物を利用して最初に城を構えたのは、鎌倉末期に真壁小六是久といわれる。小六是久の女は幸山城主であった荘資房の母であった。

その後、建武2年(1335)荘兼祐が足利氏について城を構えた(備中誌)という。一山12坊を数えたとあり(備中誌)福山合戦の後寺は再建されたが、江戸初期廃寺となった。城跡は昭和11年国の史跡となる。

報恩大師…資料4

備中福山城…資料5、6

幸山城…資料7

福山合戦

元弘3年(1333)新田義貞により鎌倉は陥落、執権北条高時は自害し141年にわたる鎌倉幕府は崩壊した。

建武2年(1335)北条高時の遺児時行が、新政に対する不平を持つ武士を吸収して鎌倉を攻撃した(中先代の乱)。足利直義は鎌倉を出て戦ったが敗れたため、足利尊氏は後醍醐天皇の勅命もないままに京を発って鎌倉に向かった。乱平定後も鎌倉に留まっていた尊氏に対し、後醍醐天皇は新田義貞に追討を命じた。尊氏は箱根で義貞軍を破り、建武3年1月京へ入った。しかし、北畠顕家が奥州から尊氏を追って上洛すると、形勢は一転官軍が勝利した。

建武3年2月、尊氏は九州へ敗走。播州室ノ津で光厳上皇の朝敵討伐の院宣を受ける。これが南北朝両立という異常事態の発端となった! 播州白旗城には赤松円心が尊氏への追撃を阻止すべく立てこもった。新田義貞が白旗城に50日間も釘つけになっている間に尊氏は4月3日、九州、四国の兵を集め五百艘の船団を組み博多を発った。

これより前、尊氏は箱根で義貞軍を迎え撃った後、福山城には反建武新政勢力として、備前児島の佐々木信胤、備中の荘、真壁、陶山氏らが立てこもり、児島高德ら官軍との攻防があった。高德は城を落すことが出来ず、三石城へ引き揚げ籠城するが、この城も足利方に落ちた。

新田義貞方の先鋒大井田氏経は、山陽道を進出し2千騎で福山城を攻撃し陣をとり足利軍の東上に備えていた。このころ児島高德は熊山に挙兵した。九州を発った足利軍は、5月5日鞆浦に至り、直義が陸路を尊氏は海路を進み、5月15日に直義が福山城を包囲した。「太平記」によれば30万の軍勢であったという。新田軍は主力を備前・播磨の境の船坂峠に釘つけとなっていた。福山城中では「城の構えは未だ出来ておらず大軍を受けることは不可能だ」との声もあったが、氏経は「ここで討ち死にして名を子孫に残そう」と迎え撃った。

合戦は16日未明から始まり、寄せ手は南の浅原峠から攻め上った。2日目には氏経は城を出て戦い、3日目には残兵四百騎をまとめ船坂の三石城の新田軍に合流するため敗走した。この間、十数度も戦ったという。後、直義が首実験をしたところ討ち首は1353という凄惨な攻防であった。

福山城が陥落したことは新田軍の士気に大きな影響を与えた。足利軍の福山城攻略から更なる東上を知り、三石城、白旗城の包囲を解き摂津へ後退した。5月25日、新田、楠木の連合軍は足利軍と決戦の時を迎えたが、

楠木正成、^{まさすけ}正季兄弟は手勢350人を率いて湊川で戦うも、3万の敵に囲まれ、最期は刺し違えて果てた。

この後、足利尊氏は上洛し、新田義貞と分かれた後醍醐天皇を御所に迎えた。持明院統の光明天皇を擁立し（北朝）11月7日には17カ条からなる「建武式目」を公布し京都に幕府を開き、室町幕府が発足した。王政復古を悲願とする後醍醐天皇は吉野へ脱出遷幸し（南朝）、これより南北朝の対立はその後46年間も続くこととなった。

佐々木信胤…資料8

朝原山安養寺

高野山真言宗。開山は弘法大師。本尊は毘沙門天像。朝原千坊の総称として朝原寺が、その中の有力寺院としての安養寺の存在があった。臨済宗開祖の栄西も11歳から数年安養寺で修業したという。治承元年（1177）鹿ヶ谷の陰謀（平氏討滅）事件で、備前の国に流された藤原成親が朝原寺で出家した（源平盛衰記）という。彼は後、吉備の中山の有木山で殺

害された。

安養寺には40余体の毘沙門天像が伝来する。もとは108体を有したといわれ、朝原寺の毘沙門堂に祀られていたもの。福山合戦の際朝原一山が焼失、残った毘沙門堂は安養寺が守護した。毘沙門堂は保延元年(1135)の創建で、元弘2年(1332)檜皮葺から瓦葺になり、後再興、大永3年(1522)に完成、落慶法要が営まれた。享保2年(1717)安養寺は毘沙門堂の東隣へ移転した。

梵跋沙門天立像、吉祥天立像はいずれも毘沙門堂建立の保延元年頃の作で、国指定重要文化財。昭和12年に毘沙門堂裏山で発見出土した経塚のうち、

瓦に法華経・般若心経および不動明王・阿耨如来・薬師如来・如意輪観音の四仏をきざんだ図像瓦、瓦経など国の重要文化財となっている。

平安末期の末法思想により、經典を地中に埋めて後世に残そうとしたらしい。

毘沙門天…資料9

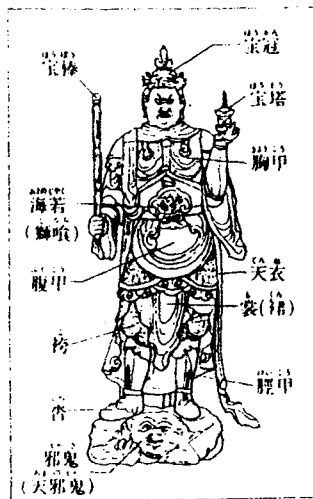
安養寺の重要文化財…資料10

資料9

(二) 毘沙門天 多聞天と同一のものであるが、独尊として信仰される場合は梵名を音訳して毘沙門天という。北方守護の神であるが、インド北方には多くの財宝があるというので福德の神ともされ、やがて七福神の一つにくみこまれた。

像容は甲冑をつけ、片手に宝棒か鉞をもち、片手に塔を捧げるのがふつうであるが、塔をもたない像などもある。脇侍として吉祥天と善膩師童子を従えることもあるが、インド神話が仏教にはいり毘沙門天の妻が吉祥天、子が善膩師童子であると伝えられるからである。

毘沙門天の異形に兜跋毘沙門天がある。西域兜跋国(吐蕃又はトルファン)に出現して外敵を退散させたといわれる毘沙門天で、王城鎮護の神とされた。像容の特徴は裾の長い変った甲と海老状の籠手をつけ、筒状の宝冠をかぶり、二鬼(毘藍婆・尼藍婆)を従えた地天の肩に立つこと。



毘沙門天像(浄瑠璃寺、京都府) 藤原時代、木造



兜跋毘沙門天像(東寺、京都府) 唐代、木造

資料 1

おおいだうじつね 大井(江)田氏経

生没年未詳。南北朝初期の武将。『太平記』では大江田式部大輔と記されている。南朝方で、新田義貞の弟脇屋義助に属す。1336年(延元元=建武3)京都で謀反した足利尊氏を追撃して備前船坂(現備前市三石)で勝利を取め、さらに備中に進軍し、当時足利方であった福山城(現都窪郡山手村)を攻略し、付近の義兵1500余騎とともにこれを占拠した。しかし、九州に逃れ、態勢を立て直して反撃してきた足利勢と同年5月15~17日に戦闘、17日には自ら1000余騎を率いて福山城より打って出たが敗北。氏経は残兵を集めて退却し、三石の本軍に合流。この時、氏経は19歳という。→福山合戦 /難波俊成

資料 2

おうじごんげん 王子権現

王子権現の信仰は熊野若一王子権現の信仰の流れをくむもの。新熊野権現由来によれば〈^{まんのびやうじや}役行者*の高弟義学の徒、熊野本宮の神輿^{みこし}を奉じて備前児島に上陸し、霊地を求めて四十九カ所に神輿をとどめ^{まつ}祀る〉とある。祭神は事解^{ことまかつ}之男命である。王子権現祭祀は備前、備中、美作の一円に分布、広く信仰されている。そのうち総社市軽部には〈おうじさま〉と呼ぶ宮があり、乳神さまとして布製の乳房型を供える。また、真庭郡勝山町見尾では、旧12月14、15日に王子権現の社殿で若者がトギをして夜を明かすなど特異な習俗がある。 /佐上勝夫

資料 3

だいかくだいそうじょう 大覚大僧正

1297~1364(永仁5~貞治3=正平19)日蓮宗を備前、備中、備後地方に布教した僧侶。出自については、後醍醐天皇皇子説、関白近衛経忠の子息説などの諸説があり、一定しない。『本化別頭仏祖統記』によると、最初真言宗の嵯峨大覚寺に入山したが、17歳のとき、京都布教に成功した日蓮の高弟日像の感化をうけ弟子となった。のち日像の後をうけて京都妙顕寺2世の法灯を継いだ。1358年(延文3=正平13)桂川上流で雨乞いの祈禱を行い、その効験によって大僧正に任ぜられたという。

備前に最初に入ったのは、御野郡浜野村（現岡山市浜野）で、この地の豪族*多田氏*の帰依をうけ松寿寺を創建、ついで二日市村（現岡山市二日市町）に妙勝寺を開いた。これが備前法華の始まりとされる。その後、真言宗であった*福輪寺*（現妙善寺、岡山市津島）を折伏転宗させ日蓮宗とし、備前富山城主松田元喬を入信させた。ついで、備中野山村（現上房郡賀陽町）の地頭*伊達氏*の保護を得て妙本寺に滞留、ここを拠点に西国地方に教線を伸ばした。岡山県下には、大覚によって開創されたと伝える寺院は20カ寺を超え、足跡は備後にも及んでいる。現在、大覚の足跡を伝える題目石が、県下に4カ所（和気郡和気町法泉寺、岡山市曹源寺大光院、岡山市西辛川大覚堂、都窪郡清音村軽部大覚寺）に残っており、また大覚にかかわる伝説も各地に伝わっている。
 →松寿寺→妙本寺→妙善寺→題目石→

／妻鹿淳子

ほうおん 報恩

資料 4

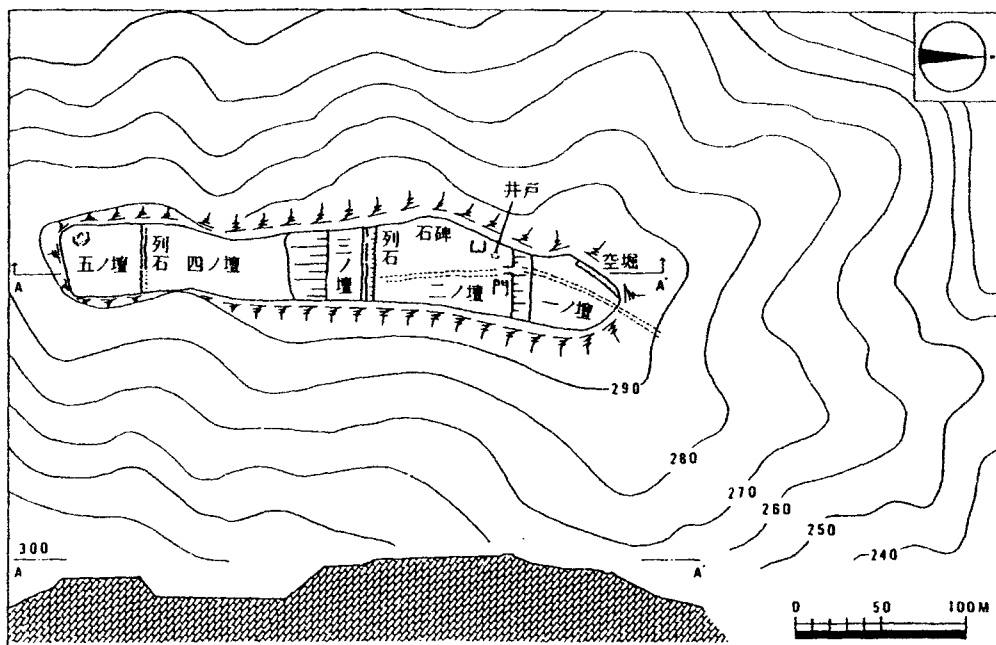
? ~ 795 (? ~ 延暦14)
 奈良時代の僧侶。備前国津高郡波河（現岡山市芳賀）に生まれる。15歳で日応寺（岡山市日応寺）に入ったといわれる。30歳で吉野山に入り、延命、滅罪、除病の功德を持つ千手観音の修法を修めた。752年（天平勝宝4）、孝謙天皇の病氣



報恩像

加持祈禱（じやくし）を行い、また桓武天皇が長岡京で重病にかかった時も観音呪（じゆ）を唱えて平癒させ、報恩大師の名と官禄を賜ったという。『金山寺文書』『清水寺縁起』『本朝神仙伝』『元亨釈書』などの記録からみて、正式に仏教を学んだ僧というより、山林で修行する山伏的性格を持った行者といえよう。岡山地方での布教活動は広範囲であったらしく、備前四十八カ寺を建立したと伝えられ、金山寺（岡山市金山寺）、千手山弘法寺（邑久郡牛窓町）、瓊伽山（倉敷市児島）など備前、備中の古刹（こしか）のほとんどの縁起に、開基や中興の祖として報恩の名が記されている。没地は子島寺（奈良県高取町）とも千手山弘法寺の永倉山ともいわれるが、現在も永倉山山頂には玉垣（たまがき）に囲まれた供養塔が残っている。→備前四十八カ寺→金山寺

／岡崎冬彦



96 福山城要図(S=1:4000)

資料5

福山城

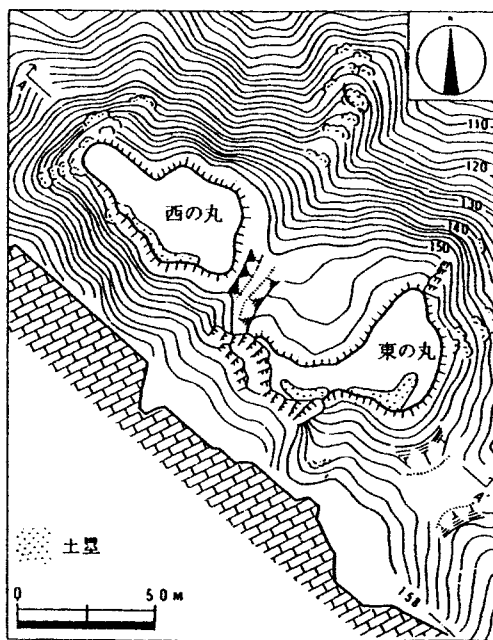
北の郭から南へ向けて「一ノ壇」「五ノ壇」と続くが、「一ノ壇」は広さ約一七〇〇㎡で、北西辺に沿って幅四mの空堀が約三〇m続き、その外側に幅一m強の土塁を付設している。郭上面は平坦でなく、多少南北に下る傾斜面で、途中にも一つの屈折点がある。その南の「二ノ壇」へ接続する傾斜面は水平距離にして一一m、傾斜面は約二〇度のゆるい角度を持っている。「二ノ壇」は南北約八〇m、東西約五〇mで、この郭が主郭である。「一ノ壇」と接続するほぼ中央に、一般に「門跡」と呼ばれる石組み基壇がある。門は北に開かれて二mほどの開口部を挟み、東西・両側に粗割り花崗岩をもって外観上、方形に

掘り付けた根石がみられる。現状から石積みの高さを推し測ることは困難であるが、おそらくそれほどの高石垣とはならず、その上に軽微な土盛りを施した程度であつたろう。その形状や高さについて断定しえないのは、基定石の全貌が明らかでないうえに、その両側に土塁が接続しているような形を呈しているからである。また、この郭の北西角に近い位置に、直径一・七mの円形の城井戸がある。周辺の木々の織りなす景観は寂寥とした庭園をしのばせ、本城が平安期に栄えた福山寺と重複しているとの説を首肯させる趣がある。あるいはそうした庭の中に配された溜め井であつたのかもしれない。

余談ながら、井戸の南には後世、氏経を祀った忠霊殿があつたが、いまはその建物も倒壊して基壇と石造り狛犬が残されているだけである。その南には東向きの「氏経表忠碑」「合戦忠霊碑」「城跡碑」の三つの石柱が建っており、その前面の平坦面には往時の礎石かと思われる平滑な自然石があるが、これらは二次移動を余儀なくされているため、正確な柱間を割り出すことはむろんできない。

この郭の南端は南に傾斜している。斜面と基底部に二列一対の列石線がみられ、いずれも南に面を揃えている。南にある「三ノ壇」は「二ノ壇」より約四m低く、本城の郭の中でもっとも狭い面積で、南北約二〇m、東西約四〇mである。その中央西寄りに一本の合戦碑が建っている。「四ノ壇」は、さらに一

○m程度下がった位置に約二一〇〇㎡の広い削平地を持つ郭である。その中央、東寄りにかけて自然石による礎石を観察した記憶があるが、今回の調査では繁茂した草木にさえぎられて確認することができなかつた。南端の「五ノ壇」は、再び一〇m以上も高い位置に構えを取り、この郭の北辺肩部には二列一対の石列があり、石列の切れ目は門のようにもみられる。南北約四五m、東西約四〇mで、南西端部には自然石がみられる。「太平記」にある未完説は、こうした辺を指しているのかもしれない。



92 幸山城要図(S=1:2500)

幸山城

資料7

この城は、二つの郭からなり、それぞれ「西の丸」「東の丸」と呼称されている。典型的な一城別郭である。

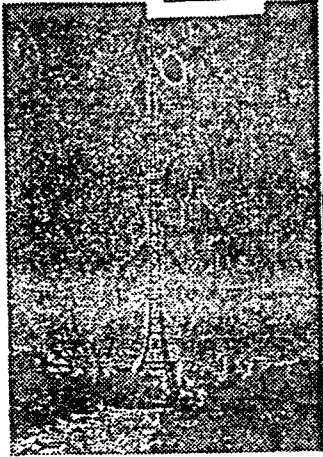
南東にある「東の丸」は、堀切によって山塊から完全に隔絶されている。箱薬研の堀切の肩幅は七〇mもある。堀切の中央には土橋が残されている。この土橋を渡り、急峻な斜面を登り詰めると、「東の丸」の郭面に出る。「東の

丸」は不整形の半円形で、上部の平坦面は幅八一四mで、面積は約七五〇㎡である。南辺は東西の長さ約三五m、東辺の南北の長さは約四六mで、徐々に北へ傾斜している。先端部には、花崗岩の巨石が露出しており、物見台として利用されていたのかもしれない。南西角、および南東角には土塁というよりも平坦面を削出したために残された残丘が、あたかも塁状を呈して看取でき、残丘の基底部には部分的に石列を認める箇所もある。これに比べ西の突出部は幅一一m、長さ二五mと、延びが短く、この部位が「西の丸」に対面している。このような両突出部によって、一条の谷頭を包摂しているのである。また、「東の丸」と「西の丸」との間にも深い箱薬研堀と土橋とを認めることができる。堀切の上端幅は約三〇mで、堀切を開削することによって、第二次防衛線にしていたことは明らかである。

「西の丸」の形態は、三〇m×二五mの不整形方形で、北西角が一張り出した形状である。この郭の北東角に方形の櫓台があった。方形の小高い基壇上には、侵入者を射撃するための、または城の内外を偵察する目的で、櫓が構築されていたものと思われる。西辺にはほぼ直線的に塁状遺構が延びている。この施設は、ひとかかえもある石を据え並べ、これを核として土盛りした珍しい造りである。

このように、一城別郭と呼ばれる城郭は、二つの大堀切によって丘尾を切断し、頂上部の郭を二分して、敵兵に一方を落とされても、他の一方によってなお戦闘が持続できるような構えをとるところに、大きな特色がある。本城の場合、「西の丸」が主郭で「東の丸」が副郭であることは、山稜の位置関係や隣絶の度合いからしても明らかであり、たとえ「東の丸」を失っても、「西の丸」に集結して、できるかぎり時をかせぎ、援軍の来着まで戦闘を持続することができる。機をみて失郭を回復することも可能なように施工されているのである。

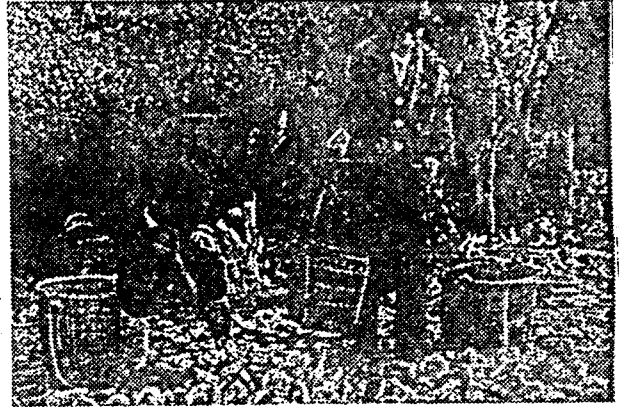
資料 6



福山の国旗掲揚塔

福山の頂上に昭和10月5月、福山合戦600年を記念して、鉄骨作り国旗掲揚塔が建設された。

塔の高さ36メートル、日の丸の旗は八畳敷という大きなものであったが、太平洋戦争の始まった翌17年、国策の金属供出で解体され往時を知るお年寄りたちは幻の塔としてなつかしんでいる。



松タケいっぱい

秋の味覚、ひきたての松タケが福山の北面中腹、八畳岩の前面に集められ、好い香りがぶんぶんするなかで、目方を測る人たちの顔もほころびている。

昭和10年の収穫風景であるが、戦前まで村の山林は、足の踏み場もないほど生えていたのに戦後はさっぱり。「よみがえれ松タケ、吉備路の山に」



福山合戦600年祭

秋晴れの空にドーン、ドーンと打ち上げられる花火、紅白の幕と4,000枚の紙国旗に飾られた福山山頂には、早朝から村民はもちろん県内外各地から参列者がぞくぞく詰めかけ、祭典の始まる午前9時には、2万5,000人(当時の新聞報道)という、600年前の合戦いらいともいえる人で埋まった。

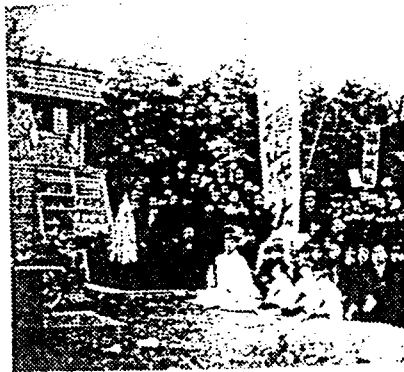
小学校校庭では武道大会、西郡公民館では奉賛画会もあり、村はごったがえすにぎわいであった。



福山城跡・名勝に選定

山陽新報(山陽新聞の前身)が昭和10年、県内の観光地10勝15景20秀を県民の投票で選んだ。

わが山手は村の象徴の「福山城跡」を売り出すため、小学児童まで動員し、村民こぞって投票に参加、427万6,528票の得票で名勝に選定され、「岡山県十勝地」と彫んだ銅板はめこんだ記念碑が城跡に建てられた。



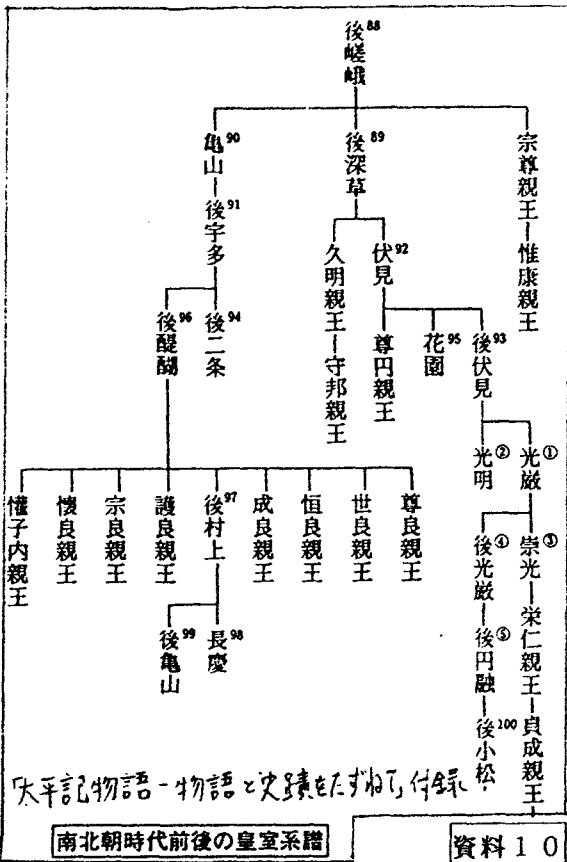
ささきのぶたね 佐々木信胤

南北朝時代の武士

岡山市飽浦付近の人

資料 8

南北朝時代の備前国の武士。生没年不詳。通称は三郎左衛門。佐々木盛綱の末裔といわれ、田井氏と同族とされる。備前国児島郡飽浦(現岡山市飽浦)を本貫としたと推定され、飽浦信胤とも称される。1335年(建武2)12月、讃岐国(現香川県)にいた足利一族の細川定禪が挙兵。これに呼応して信胤は、田井信高とともに備中国へ攻め込み、福山城(現山手村・清音村・倉敷市境)に立てこもった。これに対し、備中国目代らが手勢で合戦を挑んだが、応援の勢もなく目代側の数百人が討ち死にした。翌日、小坂・川村・庄・真壁・陶山・成合・那須・市川氏らの備中の豪族3000騎が信胤らの軍に加わり、勝ちにも乗じて後醍醐方の軍勢を破った。翌年2月、尊氏が京都の戦に負けて、わずか7000騎で九州に落ちる途上、備前国児島に到着した。この時信胤は尊氏の後詰めとして石橋和義を大将として田井・松田・内藤氏らとともに備前国三石(現備前市三石)あたりを守備した。尊氏が九州から東上する際にも、田井・内藤・頌宮・松田・福林寺らの者と備前国の尊氏方勢力として活動をしていた(『太平記』)。しかし'37年(建武4=延元2)9月ごろ、南朝方に寝返り、児島から小豆島へ渡って島を占拠し、北朝側の瀬戸内海輸送路を断った(『紀伊統風土記附録』)。この寝返りについて『太平記』は、'41年(暦応4=興国2)ごろのこととし、1人の美しい女性をめぐって、そのころ幕府の要人として大層な権勢をふるっていた高師秋との間に確執があったため、と語っている。一石橋和義一佐々木盛綱一田井信高一内藤弥二郎 / 三宅克広



太平記物語-物語と史蹟をたずねる付録

南北朝時代前後の皇室系譜

資料 10

安養寺に伝わる兜跋毘沙門天立像・吉祥天立像はいずれも毘沙門堂建立の保延元年頃の作と考えられ、国指定重要文化財。このほか毘沙門堂裏山で発見された経塚出土の瓦経二〇八枚・同像瓦五枚、塔婆型題箋八本、土製宝塔一基が国の重要文化財に指定されている。経塚の発見は昭和一二年。指定物件はこの時の出土。その後同三年に、すぐ近くから第二経塚、第三経塚が発見され、第二経塚から瓦製経筒・誕生仏、第三経塚からは大量の瓦経が出土した。とくに第一経塚に接する第三経塚から出土した瓦経の願文に応徳三年の銘があったことは、これらの経塚を考えるうえで重要な意義をもった。

- 資料 1.2.3.4.8 は「岡山県大百科事典」より
- 資料 5.7 は「日本城郭大系」より
- 資料 6 は「山手村史」より
- 資料 9 は「文化財の見方」より
- 資料 10 は「岡山県の地名」より